

「文化的多様性」 — 日独共同ゼミにおける相互理解の問題点

「文化的多様性」 — 日独共同ゼミにおける相互理解の問題点

Peter Ackermann

15年にわたって実施してきた日独共同ゼミでは、互いの「国民性」「宗教」「文化」などについて固着観念にとらわれていた参加者が目立った。留学してきた日本人学生の大多数は「ドイツ」「ヨーロッパ」「キリスト教文化」「西洋」「個人主義」のような概念の多義性と流動性について殆ど考えたことがなかった。その結果、ピントが外れた互いの質問に対して答えようがなく、話し合いがうまく進まないことが多かった。ステレオタイプは個々人の実生活との関係が薄かったからである。

日本学生は、外国へ出て初めて「日本人」として「日本」についてどんな質問にも答えなければならなかった。彼らはこのようなことを言った。「日本にいるときは、自分が日本人だという意識は持っていませんでした。みんなが同じ国民なので、そういうものを持つ必要がなかったからです。」「(日本人であることに)『誇り』というものも持っていませんでした。大阪出身者であるので、大阪人としての誇りはあった。」「日本にいたらそれが『日本人』の区切りじゃなくて『関西人』とか『京都人』とかになって、ゆくゆくは『智子』っていう一人の人に行き着く。最小単位は『私』なのです。」

われわれドイツ語圏の人は、この留学生たちにどのようにコミュニケーションをとればいいのか。簡単にいえば、一人ひとりの留学生を「日本人」としてではなく、個人として受け入れなければならない。しかし、「個人」という言葉は複雑な意味を持っている。確かに、一人の人間には独自の生活史 (life history) があり、独自の「自分」がある。また、その「自分」を以って、特定の「社会」「環境」と取り組まなければならない (コーピングしなければならない)。しかし、コーピングというのは、社会や自然環境などによってその方法は限定されているとはいっても、かならずしも文化や国によって決定されたものではない。そのため、「ドイツ」とか「日本」とか、文化や国の本質的特徴に焦点を合わせることは必ずしも妥当ではない。日独ゼミにおいては、「何々人」というより、人間として解決しなければならない問題に注意を払い、その多様性と流動性について検討し合った。

個々人の生活様式を特定の小社会において認識し一つのプロセスとして理解することは文化人類学の研究方法である。文化人類学では「人間であること」という認識が基礎をなしている。人間である上に、生活するために人類が共有する普遍的な問題に直面している。しかし、それらを解決するため、特定の環境の中で「文化」、つまり特定の方法やストラテジーを学ぶ。「文化」の定義に関して刺激的な考えを展開しているのが教育学者の Wolfgang Sünkel である。Sünkel によると、文化とは「生まれつきの遺伝情報とは無関係に、社会化と教育による個々人の知識と知恵とその応用と伝承である」としており、人間が意識的に

も無意識的にも社会化と教育によって「人間」になると強調する。Sünkel の考えに従うと、広い意味での教育によって得た知識と知恵とその応用と伝承の仕方は文化を理解する鍵である。

日独共同ゼミでは、普遍的な問題に対する具体的なコーピング戦略パターンの教育とその応用と伝承について理解を深めようとした。一方では、個々人の生活史によるアイデンティティー、他方では社会・環境とのやり取りによって形成されるアイデンティティーを認識し、またその二つのアイデンティティーが重なり合ってどのように社会の一員として人生の過ごしているかを認識することを目的とした。そこで Sünkel がいうように、問題に対処し、切り抜けるために学習したコーピング・パターンに注意する必要がある。環境は様々な形で問題の対処を余儀なくする。文化人類学は、環境として取り上げているのは、例えば、親戚関係・血縁関係、家族の形成、社会の権力体制、経済体制、教育体制、宗教、社会的階層的秩序、また、自分が生活している共同体の褒美と罰の原則、あるいはその共同体の感情表現の仕組みによって伝承される集合的記憶 (collective memory) などである。私たちのゼミでは、これらの普遍的なもの、つまり、どの人間もどの社会でも適応せざるを得ないものについて認識し、互いの「世界」を少しずつ垣間見るように努力した。本発表ではその三つの事例しか紹介できない。

1) すべての人間は、年上と年下の人、上の世代と下の世代に挟まれて生活を過ごしている。変動する現在においてその年齢と世代の順序を、主観的にどう受け止めているか。

日本人学生の意見は非常に多様な流動的だったことが、日本の年長者に対する尊敬についてステレオタイプを持っていたヨーロッパ人にとって刺激的だった。また、ドイツの家族生活を経験して、「ドイツ人の個人主義」というステレオタイプを持っていた日本人学生にとってその家族内の個人主義と連帯意識の絡み合いが刺激的だった。しかし、価値観の多様性と変動を意識するようになって、それは何に起因するか、ということを理解するのは大変困難だった。

祖父母との関係についても話し合った。そこで日本人学生の殆どが「戦争の話をした」と言った。皆が同様に答えたことに驚き、戦争時代を回顧する祖父母の現在に対する精神的葛藤の大変さに感動させられた。両親との話し合いについても議論した。人によって、話の主な相手は母親であったり、やさしい父親であったりして、会話がないうという人もいた。また、地方育ちと都会育ちの学生の発言方法の違いも顕著で、大体において、地方の方が分かりやすかったといえる。家族のメンバーの忙しさも重要なテーマだったが、日本人のいう「忙しい」という言葉はドイツ語に訳しにくいニュアンスがあったため、日本人学生は理解されていないことを感じつい黙ってしまった。一方、インターネットによる家

庭内の対話が少ないことと、離婚のための精神不安定が共通点として重要なテーマだった。

インターネットや音楽の世界に生き甲斐を感じる同世代のヨーロッパ人と日本人の間の接点があった。その接点を利用して楽しい話は展開できたが、著しい相違点も現れた。それを理解するために、一人の成長段階における社会的経験に目を向けなければならない。殆どの日本人学生にとって「部活」が決定的な影響を及ぼしたといていた。そこで先輩・後輩の上下関係についてしつけられたと述べた。また、部活とは別に、中学生・高校生ときの生徒同士の権力関係が厳しく、「親密の世界」のような若者グループの一員としてプレッシャーを感じたりいじめに遭ったりすることがあったと説明する留学生もいた。

ここで次の3点が強調すべきである。1)「部活」のように、特定の組織やプレッシャーを経験して、それによる感情や行動への影響のプロセスに目を向けなければならない。2) その組織やプレッシャーが変わってくると感情と行動も変わり、ある程度の自由かきく社会では、その組織への参加を拒否する人も必ずいる。参加するかしないかの動機は様々で、その動機に目を向けなければならない。3) ヨーロッパ社会の上下関係は本来日本の上下関係とそれほど違わなかったことを認識すれば、A文化とB文化が違うということを断言できない。むしろ、どんなメカニズムによって特定の社会の価値観が変動するか、という点に目を向けなければならない。ドイツの場合、戦前の市民社会の過酷な教育方法や秩序の絶対性とそれらの戦争社会との関連に対する批判が理解できないとドイツ風個人主義は理解できない。

日独共同ゼミでは、旧西ドイツと旧東ドイツの人が参加した。それで「世代」というものの相対性がよく見えてきた。同年齢でも旧西側と旧東側の学生の自画像が大きく異なっていた。旧西側の学生は、高度経済成長のなかで育った親の影響で、裕福さと関係なく、独善的な態度をとることが多く、また議論が非常にうまかった。ドイツ語がまだ流暢でない外国の学生に対してでさえ議論を押し付けていた。それとは対照的に、旧東側の学生は大体おとなしくて、共産主義国家で育った親の価値観の葛藤を経験したため、自分の価値観や議論に自信を感じさせなかった。このように、「世代」というものに、親子関係における価値観の伝達と受容が反映されているといえよう。ちなみにいうと、日本人学生を「バブル崩壊後の世代」と思っていたドイツ人学生に対して日本人は自分が「ゆとり教育の世代」であることを強調した。なぜこんなに感情的に反発したか、また別のゼミで考えていきたい。

2) すべての人間は特定の権力構造を持つ社会的環境を意識する。国政の日常生活への影響力が高いドイツや日本のようなところでは、「国」というものをどう受け止めているか。

日独ゼミでは、「国民性」という概念は必ず出てくる。ドイツ・スイス・日本などでは学校教育によって国民として生活できるように教えられる。よいとされていることは当然「その

国のためによい」と意味している。また、ヨーロッパでは国境を意識することがあり、昔ほど煩わしい検査はなくなった現在でも、言葉、規制、法律、そして歴史的認識もが違うため、国境を越えるとやはり「外国人」になってしまう。

日独ゼミでは、日本人にとって陸続きのヨーロッパ育ちの参加者の「国」に対する複雑な感情を理解させるのは至難だった。外国の犯罪から自国を守りたいという、むしろ国粋主義的に考えるものもいた。一方、グローバル化時代を強調して「国」に対する疑問を抱くものもいた。中立を守ろうとする伝統が深いスイスの参加者は、ドイツ人以上に「国」というものを意識し、「国」より大きい組織である EU のことを恐れた。このように「国」という話になると、ヨーロッパ人同士の話が行き詰まるが多かった。それに日本人学生が嘖然とした。

文化人類学から考えると「国」というものは一体何を指しているのだろうか。多様性に富んだ「国」は権力によって存続しているもので、その多様性がどのようなメカニズムによって統合されるかによってその国の住民の行動と感情が形成される。統合のメカニズムの一つは、異なった地域、伝統、生活様式、社会層などの相互関係の均衡とその維持である。また、住民と移民家族、元外国人とそのまま外国の国籍を持ち続ける外国人などの関係を認識することはヨーロッパ社会を理解するに当たって欠かせないことである。このようにして、国というのは絶対的なものでなくて、常に様々な議論と制度（法律、教育制度、政治制度、国防制度、選挙制度など）によって管理されるものとみなす必要がある。ちなみにいうと、現代国家の殆どがシンボルまたは神話を使って統合を目指した歴史を持っていることを忘れてはいけない。スイスの場合、それは敵に囲まれて、軍事力によって永世中立を堅持する、直接民主制を誇る天国のように美しい国である従来 of 自画像である。あまりにも現実離れのイメージのため、保守派に対して進歩派が激しい反論をし続けている。この衝突のありようこそは、ステレオタイプばかりが頭にある日独ゼミの学生に理解してもらうことが大切だった。

3)すべての人間が、万能神、縁、死者の魂など超越的なものの力を意識し、また、自分自身の有限性も意識する。この漠然とした「あの世」あるいは「死後のこと」を想像しながら「この世」で生きる人間として課題と役割をどう考えているか。

命と死に関して、誰も確実なことが分からない。そのため人知を超えたものの力を想像してしまう。日独ゼミでは、人間の力が及ばない領域について話した際日本人学生がご先祖様のことを挙げた。それは、人知を超えた領域が宗教の領域だと考えてきたヨーロッパの学生にとって非常時興味深いことだった。ただし、ご先祖様はこの世から離れて神様のところにいると考えていた日本人学生もおり、またご先祖様に全く興味がないという学生もいたので、日本人の立場の多様性がヨーロッパ人を感させた。反対に、ヨーロッパ人は皆キリスト教信者であると思っていた日本人は、宗教を完全に否定するヨーロッパ人学生の態度に驚いた。

日本人にもドイツ人にも自発的に祈りをする習慣があるということは皆の興味を喚起した。仏壇の前で亡くなったおばあさんと話したり、ご先祖様に報告したり、神社で祈願と感謝を表したりする日本人学生がいた。寝る前に目をつぶって祈ったり両親と一緒に静かに歌を歌ったりするドイツ人もいた。しかし、日本人とドイツ人の行動こそは似ていたにもかかわらず、ドイツ人は神社、お寺や仏壇の前の行動を「宗教」と定義したのに対して、自分の祈りの場所はベッドであったため、それを宗教と結び付けなかった。

宗教という観念は日本とヨーロッパでは大きく異なっている。この違いを理解するため、様々なタブーに目を向けなければならない。ヨーロッパの伝統的共同体(町の区域、村など)は常に多様性に富んでいるからこそ、統合のために宗教と教会の勢力を利用し、宗教の批判をタブーとしてきた。ゼミに参加したドイツ人の間そのタブーがまだ強く働いていたので、日本的祈願と感謝について非常に硬く考えて、直ちに真実や信仰の複雑な話をしようとした。また、同じドイツ人の宗教に対する反発が日本人学生にとって過剰反応のように取られた。このように、厳しいタブーが生み出す感情的反応と気持ちの葛藤が理解されなかった。

人知を超えたものを媒介し説教する組織の社会的影響が決定的であるため、それについてゼミの参加者に考えてもらおうとした。特に照明を当てたのは、「宗教」というより「宗派」の方がいかに生活習慣や価値観へ圧倒的に強い影響を及ぼしているか、というテーマだった。ヨーロッパでは、20世紀半ばごろまで、宗派の対立は絶対的であったため、現在まで人の道徳観は宗派によって異なっている。自分の権力を絵とか儀式によって演出することをタブーしてきたプロテスタント系教会の素朴さと非神秘性は、カトリック系教会のアピールと対立的なもので、それぞれの「宗派の雰囲気」の生活様式、美意識、道徳や価値観への影響について日本人学生は考えたことがなかった。地域のプロテスタント教会の神父さんを訪問して、神父さんが運動靴を履いて、ジーンズとセーター姿で病院訪問、結婚相談、葬式の準備などで忙しく動き回る様子を見て、なんとなくがっかりした日本人学生は「少なくとも教会のスタンドガラスによる光の神秘性が宗教的だった」といつていた。

結論

日独ゼミで痛切に感じたのは、互いの暮らし方を体系的に観察する能力の欠如と、歴史的流れに根源を持つ個々人の対処戦略方法(coping strategies)に対する認識不足だった。一年間ドイツに滞在しても、多様性と流動性を意識せずに、表面のイメージだけ(たとえば「ドイツ人は長く休みをとる」「ビールを飲む」「店員に礼儀がない」)しか持たない留学生が少なくない。日本に留学するヨーロッパの学生も同じく祭りやいじめ、丁寧なお辞儀や曖昧な答え、勉強している学生と酔っ払ったサラリーマンといった表面的ステレオタイプにしか気がつかないケースが多い。

文化人類学の観点から考えれば、人間というのは特定の「場」で普遍的な問題に直面している存在である。たとえば、だれもが上と下の年齢の人と接する必要があり、権力（例えば国家の権力、規制、管理など）に対応する必要もあり、また人知を超えたものを認識する必要もある。その普遍的な問題の解決法は原則として個々人独自のものである。

しかし、個々人の周辺に様々な議論が交わされ、個人がコーピングできるようにモデルや手本の中から選び、あるものを採択し、あるものを否定し、個人と社会・環境との相互関係によって人生を過ごしていることも見落としてはならない。多様性と流動性の人間社会のなかで、もし例外的に固定した観念があるとすれば、それはただ抽象的な「文化」ではなく、固定化のプロセスや固定化を維持するメカニズムが働いているからこそあることに注意する必要がある。このような議論、メカニズム、対応や学習プロセスに対して、日独ゼミの参加者の認識や体系的な観察力が無いことが顕著だった。

今回の日独共同ゼミに次の4点についてもっと認識してほしい。

1) 同時的なレベルでは、もっと体系的で長時間にわたってものの多様性や流動性に注意して観察してほしい。通時的なレベルでは、観察されるものの過去から現在までの成立過程と変化についての認識がほしい。

2) 異文化の中の観察や認識はプロセスであり、しかも言葉のレベルだけのものではない。感情、視線、動き、コミュニケーションの間の取り方、声の出し方などが特に大切な要素である。しかし、体で情報をキャッチしたり発信したりすることは、社会人になってからのプライドやストレスによる緊張が高いため、若いうちにその能力を身につけることの重要性を認識してほしい。

3) 人間の共通性に目を向けてほしい。人間が直面している普遍的なチャレンジに照明を当て、その普遍的なチャレンジに一定の社会・環境のなかで、どのように対応するかという文化人類学の研究方法を認識してほしい。

4) これからもっと視野に入れるべき問題は、多数の文化的影響を受けた人の立場と経験である。日独ゼミに参加した人を考えれば、参加のおかげでもう単一文化的な人間とは言えない。まして、移民、多数の場所で生活した人、国際結婚や、国際結婚から生まれる子どもなどの場合は、文字通り、一人ひとりの事情が違う。このような人はただ文化1と文化2を混ぜた性格を持つものではなく、全く独自で複雑な人間である。国際理解というものは今からこそ国と国の違いに目をむけるといふより、一人ひとりを独自の生活史とそこでの独自のコーピング戦略にもっと注意しなければならない。

Sünkel, Wolfgang: "Generation als pädagogischer Begriff". In: Liebau, Eckart (Hrsg.)
Das Generationenverhältnis. Weinheim und München (Juventa), 1997, S.195-204.